

熾盛光仏画像の形成における他画像の借用について

施 園園 (神戸大学)

本発表では、熾盛光仏画像における画像の借用と再構成について考察することで、熾盛光仏の画像形成のありようを明らかにすることを試みる。熾盛光仏は、その毛穴から五色の大光明を放つことからこの名があり、日月星宿などの天体を司る仏である。熾盛光仏は、天体運行の異変による災厄を取り除き、人々を不幸な境遇から救い出すとされる。

熾盛光仏信仰は、中国の唐から明清時代に至る長い期間流行し、これを主題とする絵画や彫刻作品も数多く残されている。先行研究では、熾盛光仏画像における構図の多様性、画像要素の特殊性が指摘されている。また、眷属である五星・七曜・九曜・十一曜、二十八宿、十二宮などの表現の発展と進化の状況について詳しく論述されている。一方で、経典儀軌において、像容の記述が曖昧である主尊の熾盛光仏の画像形成については、課題が多く残されており、検討の余地がある。

その中で、熾盛光仏と薬師仏の関連性については、既に先学によって指摘されている。山西省広勝寺下寺の元時代の「熾盛光仏会図」と「薬師仏会図」が両者を対として表した最古の現存作例とされており、十四世紀初期に山西省の南部地域に頻発した大地震と疫病の影響により造像されたものと指摘されている。本発表は、敦煌莫高窟第四六五窟の天井画にある熾盛光仏図と薬師仏図に注目し、両者が対等な尊格として対で表されることは、西夏前期にすでに始まっていたことを示し、西夏と言う時代背景を考察し、両者が組み合わせられた理由を改めて検討する。

さらに本発表では、西夏時代に制作された「熾盛光仏像（宏仏塔乙本）」「熾盛光仏十一曜星神図」、敦煌莫高窟第四六五窟の「熾盛光仏図」という三つの作品に焦点を当て、熾盛光仏画像における薬師仏画像の受容状況について考察する。

先行研究において、熾盛光仏画像における薬師仏画像からの画像の借用については、長寛二年（1164）に制作された、東寺観智院本の「九曜星図像」が取り上げられている。「九曜星図像」にある熾盛光仏が左手に鉢、右手に錫杖を持つ姿は、敦煌莫高窟第三一〇窟にある壁画の薬師仏立像を代表とする薬師仏像の画像と一致しており、熾盛光仏画像が薬師仏画像から画像要素を借用していることの証左とされてきた。ただしこの一つの作例のみで、両者の関係を語るだけでは、その背景にある画像借用の歴史的な状況を明らかにし得ない。

発表者は「熾盛光仏像（宏仏塔乙本）」「熾盛光仏十一曜星神図」に注目し、この二つの作例の熾盛光仏の持物である法器が透明にあらわされることが、薬師仏の持つ瑠璃鉢との共通性を示すものであり、東寺観智院本「九曜星図像」以外に、熾盛光仏画像が薬師仏の画像要素を取り入れた作例があることを示し、熾盛光仏画像が薬師仏から画像を借用する具体的な様相をその理由とともに明らかにする。